

# 琉球大学学術リポジトリ

## 「現実-象」としての「問と答の間」の喪失

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2017-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小嶋, 季輝, Kojima, Toshiki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/37067">http://hdl.handle.net/20.500.12000/37067</a>

## 「現実-像」としての「問と答の間」の喪失

小嶋季輝\*

### How Can We Relativise “Image of Reality” Affirming the Schooled Society?

Toshiki KOJIMA\*

#### はじめに

本研究では、「問と答の間」の喪失の問題地平を再検討し、メタ社会システムにおける問題として定位の上で相対化することで、その解決方途を提起することを目的とする。具体的処方  
の提言のために有効な調査課題及び調査フレーミングを示すことを志向している。

旧来より指摘されつつも依然として、教育の現況においては、「教えてもらう」ことを「ただ待つ人」という学習者の自己規定を生じさせる「教師への自発的服従」を始めとした、「学校文化への自発的服従」が学習を行う志向を阻むという問題が存在している(中井, 2004)。

この服従は、現代の学校教育(及びそれに併存する塾等をも含む学校文化)が生んだ学習に関する社会病理といえる。(a) 答えのある問題を用い、正答とその答え合わせを重視し、(b) 答えにたどり着けなくとも、あるいは、学習を行わなくとも、答えを参照可能な「答え合わせ」に慣れ親しむことで、(c) 学校教育を経験した学習者に「答えだけを知りたい」ということが可能であり許されるという前提が共有され、(d) その結果、慣れの拡充と作法の一元化が生じ、学校の内外を問わず学校文化に服従することとなる。

そして、この「答えだけを知りたい」という欲求とそれが許される状況が、知識欲(「知りたい」と学習意欲(「学びたい」)の断絶を生じさせている。この「問と答の間」の喪失は、「問と答の間」を曲がりくねって考え抜いていく過程という「学習の本質」の喪失を意味するものである(大田, 1984)。これは学力(=

学校的認知)の問題として扱われてきたが、学校文化の影響範囲拡大とそれを支持する社会的背景があることから、学校(文化)内のみでの解決は困難なものである(駒林, 1992)。

学習意欲と断絶された知識欲を認める上記の社会病理の影響下においては、「学校での学び」を経験した以降は、学習は回避の対象となる。そのため、発展的に接続されることが期待される「社会での学び」の存立基盤もまた非常に脆いものとなってくる。学校及び一般社会いずれの側面においても、「学校文化への自発的服従」の放棄あるいは回避を促し、知識欲を学習意欲へと結びつけ、学習を行う志向を取り戻す方途の確立は急務であるといえる。

しかしながら、先行研究は、現実的処方を検討する必要を感じつつも、それに先立つ問題の機序や構造の把握に終始している。

例えば、前掲の中井(ibid.)では、自発的服従は、超越的審級という価値意識の発達に係る理論に基づき(大澤, 1999)、個人に対する超越的規範が存在することで、その規範を具体的な教師等の他者の背後に看取し成立すると見られている。ここでは、学習主体の「問」認識において、他者との関係性の中に還元されて説明され、関係構築の「結果」として自発的服従が論じられる。これは発生機序に関して優れた説明を与えるものではある。

しかしながら、他方で、上記の説明に従うならば、記号(=「問」)に伴うメッセージの肉體性が超越論的次元から安定して保証される必要があり、なおかつ、その下で、記号の操作者かつ価値を先決する/される者としての主体を

\* 琉球大学

前提することになる。これでは、慣習的認識としての「生」に対する超越が主題となり、選択的認識としての「生」において都度生ずるものが捨象されることとなる。

中井 (ibid.) に限らず先行研究は、記号の操作者かつ価値を先決する/される者としての主体を前提するがゆえ、既成の価値とその価値観及びそれを受容する価値観に関する (学校を含む) 社会的布置と個人の対応関係に関する理論となっており、それら価値観の創発や改廃などのダイナミズムを含まない。この「逸脱」として捉えられてしまうものごとについて (機序を伴う) 理論的説明が与えられないために、そこから敷衍される「処方」を求めることが適わない。

先決においては、自己と他者の等値関係が前提される際、上述の社会病理に対する自浄作用を持たない主体が立ち現れることになる。これにより、それ以外へのコミュニケーション拡張の可能性が失われることとなる。しかし、脱することが不可能な病理ではないという予後を含めた実際に照らせば、上記説明理論を下位理論として持つ別理論、あるいは、全く別のより整合的な説明理論が予見される。

そこで本研究では、処方導出のため、先行研究の諸理論において採られている主体に関する前提を放棄することとする。

本研究においては、ヒトを捉える観点から、非「個体」を前提とし、かつ、学習を捉える観点から、非「主体」を前提とする。先に見た記号の操作者かつ価値を先決する/される者としての主体について、これはヒト=学習者を「個体」として捉える論理からもたらされているが、しかしながら、ヒト=学習者は社会的な意味でも物質的な意味においても「ネットワーク型集合体」として存在しており (西垣, 2004)、また、「学習」という現象を説明する上で、学習者という「主体」存在の想定は困難であるためである (小嶋, 2016)。

ヒト=学習者及び学習とはともに、記号の操作者では決してなく、自らが記号となり、かつ、自らにより自らが再帰的な操作を受ける現象それ自体を指す。ゆえに、「問と答の間」の喪失の問題は、記号過程の問題となる。

本稿では、上記の問題に対して、「問と答の間」を記号過程として扱うことで、「問う」という出来事、「答える」という出来事、そして、「問と答」とに關係と意味を伴う「間」を生成する出来事の各關係を扱っていく。まず、「問と答の間」を、Peirce の記号過程論を参照し、「記号」解釈の議論として位置付け、続いて、Hoffmeyer の生命記号論を手がかりに、生命体における「記号」解釈の議論へと再定位する。その上で、「問と答の間」の喪失を、西垣の階層的自律システム論を基に、メタ社会システムにおける「現実像」として扱い、メタ社会システムの相対化という論点から、「それ以外の何か」(i.e.: 異なる「現実像」)へ置換する方途を検討する。

## 1. 「問」と「答」と「間」の三項關係

### 1.1 Peirce の記号過程論

まず、「問と答の間」が人間と関わるどのような出来事であるかを Peirce の記号過程論を手がかりに考察する。ここでは、Peirce 記号論に関する先行研究の整理を手がかりに (米盛, 1981)、記号過程論を整理のうえ、「問と答の間」を記号過程に位置付けていく。

Peirce によって創始された記号 (過程) 論は、認識し得ることは全て記号であり、人間の思考とは一種の記号作用 (=環境の隠された意味を読み取ること) であるとする認識論的前提、そして、思考の対象として在ることが存在の本質であり、全ての存在は認識と思考の対象としてのみ存在するとする形而上学的前提に立ち、記号とその作用を認識論的論理的に描出・理論化したものである。この記号作用においては、「記号」=「認識 (思考) し得ること (対象)」=「存在」としての記号の論理的過程とその性質が問われることとなる。

Peirce は記号過程として、3つの要因及びそれらからなる三項關係を論じている。

Peirce によれば、論理的なプロセスは、多次元のネットワークとしてある。このネットワークを説明可能なものが三項關係である。二項關係は、分岐されない/制約された論理であり、原因と結果とを結ぶ一義的な (物理学的) 因果

律であるため、現実的な論理のプロセスとしては否定される。無論、一項からなるものは論理的过程を構成できない。それらに対して、三項関係はプロセスの分岐を持ち、分岐の延長を際限なく拡げていくことが出来る。認識の連続性が含まれている。

三項関係は、二項関係「原因-結果」に観察者を加えることで、三項関係「原因/結果/観察(者)」として表すことが出来る。観察者によって「認識し得ること」において、「原因」も「結果」も両者の関係もまた存在することが可能となる。現実世界にある複雑な、すなわち、論理的な多次元のネットワークの多項関係は全て、三項関係の組み合わせに (e.g.: 四項関係は2つの三項関係に) 分解することが出来る。

そして、「認識し得ること」は全て記号である。ゆえに三項関係の各項はそれぞれ記号であるといえ、それぞれ異なった性質を有する記号であるといえる。そのため、三項関係からなる記号過程は、各記号の性質に応じた働き、かつ、記号の相互交換の過程として捉えられる。この三項関係を構成する記号各々の性質に応じて、3つの要因が区別される。それは、[第一項] 記号として働く何かある性質 (=表現/表意) を持ったもの、[第二項] その記号が表意する対象、[第三項] 記号とその対象を関係づける解釈思想である。これら3つの要因からなる三項が、三項関係という結ばれた関係、すなわち、記号過程として立ち現れる。ゆえに、全ての記号過程の三項関係は、三項関係「記号(表現)/対象/解釈(項)」の形をとり、3つの要因全てが記号であり、3つの要因全てが不可欠であり、三位一体的関係である。

記号過程は、例えば、「何かA」 (=記号(表現)) が、「誰かX」 (=解釈項) にとっての「何かA'」 (=対象) を指し示す。ただし、単に記号表現が何かを指し示す静的な関係の描出ではなく、推論 (=都度の解釈) が発展的に変化する動的な関係を表している。現実の推論過程では、記号から生じた解釈 (i.e.: 上記であれば三項関係「A/A' /X」が表す事態) もまた記号となり次の解釈を受け、これが続いていく。

また、この記号による対象の表意は、空間だけでなく時間の隔たりをも問わない。それゆえ、予見しうる条件法的なものの在り方として、確度を伴い、実証を意図可能な、未来の対象を表意することも出来る。

以上の Peirce の記号過程論に、「問と答の間」を位置付けてみる。「問と答の間」という関係は、原因としての「問う」という出来事 (=第一項)、その1つの結果としての「答える」という出来事 (=第二項)、そして、三項関係を成立させる「問う」という出来事と「答える」という出来事をつなぐもの (=第三項) が占めることとなる。このつなぎ方、すなわち、「問」という記号に対する解釈項が「問」となる。

このことから、「問」の長短/有無が問われる部分を、現実的には「観察(者)/解釈(者)」が占めることとなる。形而上学的な考察を中心としつつも、さらに、「存在=記号」としつつも、その論理的帰結として、「観察者/解釈者」が現れる。

しかしながら、本研究では、「主体」存在としての学習者を認めない立場を採る。この「問」=「解釈項」の議論を進めるために、以下、Peirce の形而上学的な考察を物質世界一般で基礎付け、個/群/種を超えた包括的な解釈過程/ダイナミズムのモデル化に取り組んだ Hoffmeyer (2005) の生命記号論を参照したい。Peirce も人間に関わる記号は人間そのものであり、その意味で「人間は記号である」と捉えていた。しかし、Hoffmeyer は、この点に関して、「主体」存在が理論的にその地位を必要とされなくなるまでに徹底して敷衍していくこととなる。

## 1.2 Hoffmeyer の生命記号論

Hoffmeyer は、その生命記号論の中で、Peirce による記号(過程)論の対象領域を生物にまで拡大し、解釈者 (=物理化学的存在) を構成する細胞から地球規模の生態系までもを含め発展させている。これは、三項関係の解釈項を、ヒトの意識ではなく、生命体一般に拡張しようとするものである。

Peirceの記号過程では、構成された多元的ネットワークにおいて、その持続的な発展過程により一つの安定状態が見られ、この状態を「習慣化」と表現している。他方、その安定を脱しようとする過渡的状态を「無政府状態」と表現している。「習慣化」と「無政府状態」のいずれも自然の傾向と捉えられる。Hoffmeyerは、Peirceの「習慣化」/「無政府状態」の用語を、「宿命（自由の欠如）/「自由」という用語で引き継ぎ、理論構築している。

自由と自由の欠如（＝宿命）は弁証法的関係にあり、自由の欠如が高次の自由に帰結する。そして、自由の欠如は、宇宙を予測可能（＝習慣の確立）にし、生命体に備わる予測能力の発展に寄与するとし、また、そこでの予測能力を生命体をそれ以外から区別する特徴と捉える。

このことから、「生物はその存在自身で習慣を獲得する自然の傾向を持って」おり、「生きている細胞の中に物質とエネルギーの両方に関して独特な配置が出現すると、その複雑なパターンはやがて固定されて行く。この固定は繰り返しの繰り返しによって確立していく。反復はもちろん習慣化の典型であり、予測可能性、法則、秩序の鍵である」と考えられる（Hoffmeyer, *ibid.*: 56）。

以上は、Peirceの「自然が習慣を獲得する傾向を持つ」という考え（*i.e.*: 選択の際に不可避に生ずる選択規準）からもたらされたものであるが、生命記号論では、以下の地球史のプロセスをも説明するものとして拡張している。まず、物質とエネルギーが複雑・精緻になることで生命が誕生し、さらに複雑化が進み、物理化学法則の支配から生物法則の支配へとシフトし、生態系の論理が生ずる。そして、生態系の論理の元で安定して生存するもの（＝人間等）が出現し、生命による生命の支配が起こる。これにより、1つの論理が破綻し、新たな論理が発生することとなる。

上記プロセスに見られるダイナミックな力を「創発」と呼ぶ。創発は、ある性質から生ずるものの、そのある性質には含まれず予見されない新たな性質を生み出していく。これが先に示した自由の弁証法である。創発した高次の自由は、創発の契機となる欠如していた低次の自由

からは推論されない関係にある。つまり、創発の記号過程においては、記号そのものは記号が表すものに類似していても良いといえる。両者の隔間が、生物を宿命から解放し、自由を創発させるのである。

生命記号論は、この創発を含む記号過程を扱っている理論構成となっている。それは、時空間を縦断的かつ横断的に理論射程に収める。しかしながら、ここでは、本研究の関心に直接関わる「水平方向の記号過程」を中心とし、以下に整理することとする。水平方向の記号過程とは、生態系での記号過程を指し、中長期的な時間軸ではなく三次元空間に基づく記号の交換過程である。

水平方向の記号過程は、生物間及び生物と外の環境との間（＝記号圏）で起こる記号過程とも表現出来る。生物＝記号は、外部の記号論的要求に応答することで、自分の世界（＝生命記号過程）の存続が許されている。これは要求に応答出来た範囲内（＝記号論的地位）に限られる。そして、それが可能となるか、すなわち、生物が自分の外部に存在するものを自分の内部で表現出来るかは、周囲の環境から記号を読み取る能力に依存している。

このことから、外部における記号過程を内部における記号過程へと関係させることが、外部における記号過程を維持することの条件として見出される。そして、同様に記号過程である

「内部としての記号過程」もまた、「さらなる内部」への記号論的要求を経て、「さらなる内部」での記号過程の存続可能性を問うこととなる。これらの多元的な生命記号論的ネットワークの各過程がそれぞれ応答し続けることで、生命体は生命体として組織されている。いずれかの次元、いずれかの過程を指して生命体と呼ぶことは出来ない。

この生命の在り方をHoffmeyerは、「自律したカオス」と表現した。「私たちの中に「誰か」がいるということだ。生命は「誰か」の中にある「誰か」の中にある「誰か」……という原則に基づいたものである。周囲の状況を解釈し決定を行う権限が器官、組織、細胞に委任されるときに、出現してくるものは階層的な記号

過程のネットワークであり、そこから集積されて出てくる出力が調和のとれた生物個体での行動である。この自律したカオスを単体で支配する権威者はいない」(ibid.: 156)。

以上に見た様に、Hoffmeyer の生命記号論に照らせば、生命を構成するものから、生命に構成されるものに至るまで、あらゆるものが記号過程として論ずることが可能であり、そして、何よりも、「観察者/解釈者」とは特定の個人や個体のことではない、という知見が得られる。

Peirce 記号過程論に位置付けた際、「問と答の間」の解釈項に現れた「観察者/解釈者」もまた、特定の個人や個体のことを指すわけではないことが分かる。つまり、ここでの「観察者/解釈者」は、「観察/解釈」として生じてくる現象のことであり、その現象を記号とする記号過程に「観察/解釈」される対象の帰属のことである。そして、その生じ方、すなわち、具体的な(前者の)「観察/解釈」が「問」として現象しているということとなる。

ここまでで、「問」と「答」と「間」の三項関係が、「主体」存在を前提せずに、生命体における「記号」解釈の過程に定位することを確認することが出来た。それでは、続いて、「問と答の間」の喪失という問題、すなわち、「記号圏」という記号論的なネットワークにおいて「記号論的地位」を占めようとする、上位から制約される下位の記号過程のダイナミズム(=「自律したカオス」)を捉えたい。

## 2. メタ社会システムにおける「現実-像」としての「問と答の間」の喪失

### 2.1 基礎情報学と階層的自律システム

ここでは、前節の議論の延長を、西垣(2004)の階層的自律システム論に沿って試みたい。

階層的自律システム論は、西垣の基礎情報学の成果の一部として提出されているものである。この基礎情報学は、生命記号論とオートポイエーシス論を理論基盤とする。Hoffmeyer の生命記号論は生命体による意味解釈の「構図」を示すものであり、ゆえに、「記号(=情報)」の「意味」を扱うことが出来ないことを記号論

の限界として指摘し、その上で、「生命体による意味解釈とはいかなる特徴をもつのか」に答えを出すために基礎情報学は構想されている。

そこで、まず、西垣による、生命記号論解釈、オートポイエーシス論解釈、それを受けた基礎情報学構想を順に確認する。その上で、階層的自律システム論へと論を進めたい。

基礎情報学は、その原理として生命体から見た情報概念を扱い、その理論射程としてヒト特有の心的システム及びヒト同士のコミュニケーションからなる社会システムを収める。中心テーマは、生物の意味処理手段としての「情報」となる。それゆえ、基礎情報学では、記号過程を情報交換過程と捉える。

ここでの「情報」とは、生命体という解釈者とともに出現し、生命体が解釈を行うことで世界が立ち現れる、現象記述の記号論的關係概念として使用されている。情報を担う物理的存在を、一種の「パターン」、厳密には、「生物がパターンをつくるパターン」と定義する。生物が行う意味解釈の自己言及性(=再帰性)が反映されている。

それゆえ、西垣は、生物にとって意味のある情報全てを指す、広義の「情報」概念として「生命情報」を定義し、その下位分類として、「原-情報」「社会情報」「機械情報」を区別する。「原-情報」は、生命情報によって生ずる生命体の構造変化としての生命情報を指す。「社会情報」は、基礎情報学が対象とする主たる「情報」であり、「原-情報」を観察者が観察し、抽出し、外部の伝播メディア上に記述することにより生ずる、狭義の「情報」概念である。ヒトによって取り出され、ヒトに特有のシンボルで記述された生命情報を指す。「機械情報」は、社会情報の意味内容が潜在化し、表現形式だけを持つ情報であり、効率的処理のために社会情報が変換されたものである。社会における意味解釈の斉一性をもたらす。

この情報概念で生命記号論を捉えると、Hoffmeyer のいう「宿命と自由はそれぞれ、生命体が情報(記号)の意味を解釈する際の、規則性と誤りに対応」することとなる(ibid.: 57)。高次の情報交換は、その意味解釈におい

て、新たな規則性（＝宿命）と逸脱（＝自由）を生じさせる。この情報交換のネットワークの発展が「創発」を引き起こす。複雑な情報交換は、生命体の予測可能性、そして、それを通じた生存可能性を高める。

生命記号論は、生物による記号解釈の自由度に着目し、生物の行為を歴史的に捉えることで、規則性と逸脱を論じ、創発（進化）の説明を可能とした。さらに、基礎情報学は、ヒト及びヒト社会もまた生命記号論と同様の歴史的過程と捉える。進化史において「生き延びていく」のは、個体や種や遺伝子というより、むしろ「情報の意味解釈の仕方」であるという見解に行き着く（ibid.: 63）。これにより、「生命体＝システム」というヒトとヒト社会を同様に扱える考え（＝システム論）が求められ、これに応えるのがオートポイエシス論である。

オートポイエシス論を踏まえると、基礎情報学では、生命体はシステムであり、特に、オートポイエティック・システムである。オートポイエティック・システムとは、構成素が構成素を産出するプロセスのネットワークと定義され、内部と外部、入力と出力が存在しない自律システムのことである。なお、ここでいう「構成素」とは、システムが持続することによって生じ、かつ、システムを持続させるものである。また、このシステム概念は、位相概念である。物理的存在としての生物を表してはいない。例えば、物理空間上の人間に重ね合わされた位相空間上のシステムを指す。さらにいえば、このシステムはヒトの心的システムであり、この重ね合わせを構造的カップリングと呼び、人間と構造的カップリングしたヒトの心的システムは特に「観察者」と見なされる。

定義を元に、生命体をオートポイエティック・システムと見なせば、生命体に係るあらゆる情報「伝達」の成立はあり得ないことになる。それゆえ、基礎情報学は「コミュニケーション」を、「伝達」が生じていると各自律システムに見なされる「擬制のメカニズム」と定める。

ただし、「コミュニケーション」を構成素とする上位の社会（オートポイエティック・）システムから「コミュニケーション」を生じさせ

ている心的システムを捉えると、非自律的（＝社会システムに拘束・制約される）システム（＝アロポイエティック・システム）と観察される。そのため、オートポイエティック・システムであり、かつ、上位の観察においてアロポイエティック・システムでもあるように「拘束・制約関係」が存在する、と考えることが必要となる（i.e.: 上位システムは下位システムの集合ではない）。

この自律システムの階層性を扱うのが「階層的自律システム論」である。

## 2.2 メタ社会システム

この階層的自律システム論においては、階層的自律システムの階層の最上位に「マスメディア・システム」が位置付く。マスメディア・システムとは、「マス・コミュニケーション」を構成素とする社会システムである。階層性における拘束・制約関係により、社会に参加する個人の心的システムに対して、マスメディア・システムが拘束・制約を与えることとなる。

マスメディア・システムに限らず、上位の各（社会）システムが個人の心的システムを拘束・制約する。その際、上位の各（社会）システムが、心的システムにとっての「現実」（＝見た目上の「世界の有り様」）を形づくる。結果、上位の各（社会）システム毎に「現実」が生じ、心的システムは複数の「現実」を同時に生きるという事態が生ずる。

そして、各（社会）システムに対して、最上位のマスメディア・システムは「メタ社会システム」の位置にある。マス・コミュニケーションもまた「メタコミュニケーション」としての性質を持つ。メタ社会システムとしてのマスメディア・システムは、各社会システムを拘束・制約することを通じて、さらに下位階層の各心的システムに対して、複数の「現実」へつじつま合わせを行う疑似統合的イメージを与えている。この疑似統合的イメージを「現実像」と呼ぶ。

「現実像」は、虚像であるにも関わらず、マス・コミュニケーションが斉一的に提供されることから、広く共有されることとなる。これは、形式的で効率的な処理の可能な機械情報の

流通によって実現され、意味解釈の斉一性をもたらし、維持するものである。

国民が共通理解できる斉一的な「現実像」が誕生することにより、各心的システムは、共通「現実像」を前提として、そして、明確な前提（＝「当然の社会の姿」）ゆえに疑うこともなく、さらなるコミュニケーションをそこから行おうとする。

この事態は、心的システムにとって、階層性の性質により、下位に位置付く心的システムが捉え（ようとす）マスメディア・システムは、上位にあるマスメディア・システムそれ自体ではないため、前提を破棄する術を持つこともその術の存在に思い至ることも適わないものであることに起因する。

このように階層的自律システム論に捉えられるメタ社会システム/メタコミュニケーションという論点を持てば、ヒトの心的システムは社会システムとの拘束・制約関係により、複数の現実が与えられ、さらに「現実像」として生ずるものにそれらを束ねられてしまうこととなる。

「問と答の間」に関して、そこに関わる個人は、複数の現実を生きる可能性を持ちつつも、一つの統合的現実である「現実像」へと生き方が収束されることとなる。この一つの統合的現実が、現存の社会病理と捉えられる問題状況を踏まえれば、「喪失」という生き方を引き受けさせる在り方であるといえる。

以上により、「問と答の間」の喪失という問題、つまりは、「記号圏」という記号論的なネットワークにおいて「記号論的地位」を占めようとする、上位から制約される下位の記号過程のダイナミズムを捉えるに至った。これにより、ようやく本研究の目的である、「問と答の間」の喪失という問題の解決方途の検討に移ることが出来る。下位の記号過程が新たな自由を創発する様を捉え、さらに、そのことを通じて、創発の誘発の可能性を探りたい。

### 3. メタ社会システムの相対化

前節において、メタ社会システムにおける「現実像」としての「問と答の間」の喪失を確認した。それは、複数の「現実」につじつま

を合わせる形で、「喪失」という生き方を引き受けさせるものであった。

そして、メタ社会システムをマスメディア・システムと定めるならば、現実の経過を振り返ってみると、古くからの「問と答の間」の短縮を促す言説が安定して存在していたことが確認可能である。

しかしながら、マスメディア・システムの特徴には、不安定性・非一貫性というものがある。マスメディア・システムは、下位の社会システムのコミュニケーションを再解釈・統合してメタコミュニケーションを行うため、往々にして短期的/局所的な「現実像」でつじつま合わせを行っている。また、マスメディア・システムは、複数の現実にまたがる「現実像」を提供するゆえ、相反する現実同士へのつじつま合わせも行うこととなる。論理的統一性を持たない「現実像」でつじつま合わせを行っているといえる。

では、そうであるとするならば、「古くから」の「安定」した「現実像」に疑問符を差し挟まざるを得ない。

不安定性・非一貫性を持つ（メタ）社会システムは、心的システムのコミュニケーションにおける論理的不整合により損なわれるといわれている。つまり、本研究が考察してきた「古くから」の「安定」した「現実像」である「問と答の間」の喪失は、不整合性を生じさせない、あるいは、不整合を生じさせてこなかったといえる。これはつまり、「問と答の間」の喪失に関して、社会システムが心的システムをその様に拘束・制約し、かつ、社会システムがメタ社会システムと、その拘束・制約をたとえ必要とせずとも整合的であるということである。すなわち、「問と答の間」の喪失という「現実」を束ねる「問と答の間」の喪失という「現実像」という論理的配置が存在している。

それゆえ、「問と答の間」の喪失という問題の解決を目指すのであれば、メタ社会システムと社会システムを同時に相手取る必要があるということになる。解決の方途としては、「現実」と「現実像」を同時に転換する必要がある。



ここで可能性として解法を試論的に示すとすれば、まず考えられるのは「それ以外の何か」(i.e.: 異なる「現実像」)へ置換する解法である。それは、異なるメタ社会システムの創発、すなわち、「社会システムの進化」を企図するものである。これは、異なるマスメディア・システムの創発とマスメディア・システム以外のメタ社会システムの創発を含む。しかしながら、具体的処方があるようなものであるかは、本研究の範囲を超える。

また同様にあり得る別解として示すならば、心的システムが上位システム(=社会システム)に適応しないという路の可能性である。この前提としては、実は適応しなくとも本質的な意味での生存可能性に影響しないこと、換言すれば、心的システム及びそれと構造的カップリングしている生物において最低限の維持が可能であることによる。しかしながら、いまある形の「現実」/「現実像」を生きる者=我々にとって現実的な解では無く、また抜本的な解決にはならないが、可能性の一つとしてはあるという程度である一方、実際に実現されたことのない「現実」であるため、我々の想像の及ばない未来の創発(=「心的システムの進化」)を含むものでもある。

ここまでの理論的考察に対する実証的課題として、システム/過程の維持・持続という観点では、メタ社会システム=社会システムとして心的システムを拘束・制約する場における心的システムの実態把握が求められる。他方、システム/過程の創発という観点では、「自由」(=ルールからの逸脱)により、「問と答の間」の喪失からの脱却を行う心的システムにおけるメタ社会システムと社会システム及びそれらが与えていた「現実像」/「現実」の実態把握が求められる。

なお、上記における把握の対象となっている2つの実態は連続的であり、並置の関係でもある。

## おわりに

本稿は、「問と答の間」の喪失の問題に対して、具体的処方の提言のために有効な調査課題及び調査フレーミングを示すことを志向し研究

に取り組んだ。経過の議論で、記号過程に関する理論を手がかりとして、その理論的發展から問題を整理していった。結果、①「(問と答の間)」として生ずる事態も、②「(問と答の間)」の喪失として生ずる事態も、記号過程における同一の現象であるといえる。そして、①に対する②の現象の仕方の質的な違いは、上位の記号過程に規定される不可避の制約である「現実像」により「問=短い」が「宿命(=自由の欠如)」として受け入れざるを得ず、「問=可変あるいは長い」などの可能性がその存在可能性を含めて排除されていることに依った。

この新たな問題地平においては、2つの解法の論理的にあり得る可能性が見出しうる。1つは、自由の欠如において創発を求めるという路である。これは別の「現実像」を求めることによる解法である。ただし、「問=短い」以外の何かの可能性が得られるだけである。他方いま1つは、宿命下において、過程の適応を行わず非適応で生存可能な過程を維持するものである。これは、本質的生存のみを維持し社会的生存を放棄することであり、(過去より現実的に生ずることはあったが)「(「現実像」が与える)常識的には」避けるべき解法であった。

先行研究で採られてきた従来の理論構成においても、問題を捉えることは出来ていた。しかし、同時に、その解消の不可能性が暗示されてもいた。本稿で示された問題射程は、現状提示可能な解法こそ困難なもののみではあるものの、問題の維持の仕組み、ゆえに、介入の存在、さらに、解消への処方の形式を予見するものである。理論仮説の生成の場の選定方法及びそこでの現象把握の方法に対する理論的枠組みを提供している。

## 謝辞

本研究は、公益財団法人北野生涯教育振興会生涯教育研究助成「知識欲と学習意欲の断絶に関する実態調査」(研究代表者: 小嶋季輝)を受けて行われた研究成果の一部である。

<引用・参考文献>

- Hoffmeyer, J. (2005). 松野孝一郎, 高原美規 (訳). 『生命記号論: 宇宙の意味と表象』 青土社.
- 小嶋季輝 (2016). 「「学習」概念のセカンドオーダー・サイバネティクスの転回: システム「学習」の研究地平」 『日本学習社会学会 年報』 no.12, pp.90-98.
- 駒林邦男 (1992). 「「学校知」の学び (「学校的認知」) と日常的認知: 上野, 有元氏の【学校 (算数) の言語ゲーム】論の批判的検討」 『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』 vol.2, pp.19-41.
- 中井孝章 (2004). 『「学校知」変革の戦略』 日本教育研究センター.
- 西垣通 (2004). 『基礎情報学: 生命から社会へ』 NTT 出版.
- 大澤真幸(1999). 『行為の代数学: スペンサー=ブラウンから社会システム論へ』 増補新版 青土社.
- 大田堯 (1984). 『学力とはなにか』 国土社.
- 米盛裕二 (1981). 『パースの記号学』 勁草書房.